

ドイツからの追い風便り

—豊かな土壌で基準を考える—

式部 絢子

要 旨

2013年7月から2年間、国際交流基金ケルン日本文化会館で日本語講座の運営・日本語教師研修会の開催等に携わってきた。個性豊かで多様な意見が溢れるドイツの日本語教育実践者たちと日々、小さく大きく議論をする中で考えさせられることが多々あった。この報告はその一例として、日本語の「できる」をきっかけに「基準」とは何なのか考えさせられた、という話である。

1. はじめに

私は2012年9月に日本語教育研究科を修了し、2013年7月から2年間、国際交流基金からの派遣でドイツのケルンという西中央部に位置する、ビールと大聖堂とライン川が美しい街で、日本語教育専門家として活動してきました。

この仕事は2~3年で終了する任期付きのお仕事なので「たった2年で何ができるんだろう？むしろ何かしていいのだろうか？」と行く前にうろうろと迷った記憶があります。

「ドイツの現場を土とすると、シキブさんは風。どんな風を吹かすかはシキブさん次第。」と、修士仲間に言われ、わかったようなわからないような顔でケルンに降り立ちました。

わからないなりに描いていた“風”はありました。それは「あなたはどうか考えるか？」という自分の実践経験をもとに話し合える土壌が作ればいいなあと。そういう風を“弱”くらいで送れたらいいなあと偉そうにもそう思っていました。

この実践報告では、国際交流基金ケルン日本文化会館での業務内容を紹介し、次いで出会ったドイツの日本語教育実践者の方々とのやり取りを通して考えてきたことについて報告したいと思います。

2. 業務紹介（国際交流基金ケルン日本文化会館の場合）

世界遺産のケルン大聖堂がすぐ側にそびえ立つケルン中央駅から市電でわずか5駅のところに、国際交流基金ケルン日本文化会館（ドイツ語名：Japanisches Kulturinstitut）があります。ケルン日本文化会館（以下、JKI）は、日本政府によって1969年9月に開館し、文化・芸術、日本語教育、日本研究・知的交流等の事業を展開しています。具体的には日本映画の上映や、アーティストの作品展示、講演会、日本研究者への支援、日本語

学習機会の提供等を行っています。

私はこの日本語チームに所属し、①日本語講座の運営、②日本語教育アドバイザーとして活動してきました。

日本語チームは、日本語教育上級専門家・日本語教育専門家・常勤講師・日本語事務の4名で、活動していました。学期中はここに13名の非常勤講師が加わります。JKIは、日本語学習者の数（1学期約240名）、講座の種類も多く、学期中はフル回転。朝から晩まで毎日一緒に過ごす上司、同僚と「家族経営の八百屋だね」と言いながら、忙しく充実した2年間を送りました。

JKIでは、様々な種類の日本語講座を提供しています。以下の表の通り、月曜日～木曜日、土曜日は日本語講座が開講されています。9レベル13コースの定期的な日本語講座に加え、土曜日は入門体験講座や、日本語しゃべりーれん¹という日本語交流会、日本文化体験講座等を月に1度の割合で提供しています。私はその企画、運営に携わりました。

表1 日本語講座運営スケジュール

月	火	水	木	土
	16:30-18:30			<ul style="list-style-type: none"> ・日本語講座（毎週） ・日本語入門体験講座（毎週）
	日本語講座			
	18:45-20:45			<ul style="list-style-type: none"> ・日本文化体験講座（月1） ・日本語しゃべりーれん（月1）
	日本語講座			



写真1 ケルン日本文化会館のみなさん

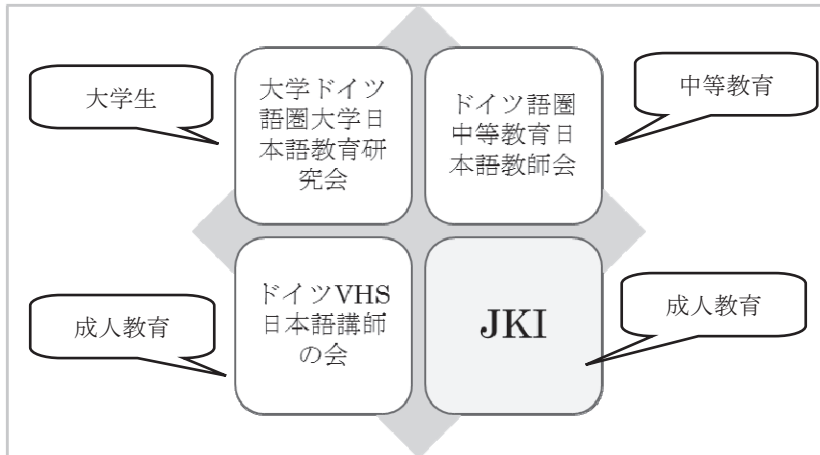
3. ドイツの日本語教師会

次に、ドイツの日本語教師会について簡単にご紹介します。ドイツには、3つの日本語教師会があります。

それぞれの教師会が年1回、3日間の研修会を行っています。独立した教師会ですが、それぞれつながりがあり、オープンで参加しやすく温かい雰囲気があります。JKI主催の研修会はこの3つの教師会を緩くつなぐ役割も持っていたように思います。

JKIの日本語講座に所属する非常勤講師や、JKI主催の研修会、教師会を通じて出会った教師の方々は非常に個性豊かで、多種多様な意見で溢れ、こちらがちょっとした話題提

表2 ドイツ日本語教師会（※吹き出しはその機関の主な学習対象者です。）



供をただで、話が止まりません。例えば、漢字学習について学習者の取り組み方や、教師の扱い方などの話を聞くと、「やっぱ、読めるだけじゃなくて、書けるようになって欲しい」「書くのは大変よ。でも、アートみたいだから好きな人多いよね」「でも、テストに出すと嫌がる。笑」「あんまり読めなくても意味がわかればいいんじゃない?」「ネットで検索できればいいのかも」「形に意味があることに気が付いてほしいけど…」などといった具合です。

このように湧き出る話の中で、私は「基準」のあり方について考えさせられたのです。

4. 「基準」って何？

私がJKIの日本語講座で使っていた『まるごと 日本のことばと文化』(来嶋ほか2013)(以下、『まるごと』)という教材は、日本語を使ってできることを「Can-do」の形にして、その言語行動ができたかどうかで評価していきます。もちろん「できる」方を目指しているので、その達成が評価されるわけです。例えば「待ち合わせの時間と場所について話す」というCan-doがあれば、待ち合わせをする相手に待ち合わせ場所と時間が伝えられる(もしくは逆)ことができればいいわけです。ここで「〇〇という文型を使っていないから、できない」という基準で評価をしない、つまり人の言語行動を教師既定の文型で判断しないという方向は共感できるものでした。

その反面、人の言語行動がこんなにわかりやすいCan-doに細分化され、できた／できないという観点で進められていいのだろうか?と、多様な考えをする学習者を前にどのような「基準」でその評価を考えていけばよいか、悩みました。

『まるごと』を扱った研修会でもこの達成をどう見るかが、よく話題になりました。

例えば、先の「待ち合わせ」についてのCan-doで言えば、

- ・やっぱり〇〇っていう文型が出てこないダメだね。

- ・場所がわかればいいんじゃない？
- ・じゃ、単語でいいのかな。
- ・それなら発音とかアクセントちゃんとしないとわからないよね。
- ・…待ち合わせできなければ、会うこと自体やめちゃうのかな？そんなわけないよね。会えなかったらダメだとするのかな？

と、「できる」の基準を巡って、さまざまな意見が飛び交います。そんな時、私はハッとされられ、翻弄させられ、その基準をどこに求めたらいいのか、全くわからなくなります。「日本語」に対する評価基準だから「日本語」に焦点をおくことが当たり前かと思いますが、それを使う「人」や「行動」に目を向けると、そうも言ってもらえないでしょ？という気概、気迫、熱量…がビシビシと伝わってくるからです。

『まるごと』Can-doの達成基準を求める時は「JF日本語教育スタンダード」²（以下、JFスタンダード）を見れば、おそらく、わかるでしょう。

しかし、ここにいる教師たちとは、JFスタンダードに沿った評価基準は、「正しい基準」を求めるものというより、実践者同士が話し合う材料として機能していました。自分たちの考えを話し、評価基準を参考にまた話す。その結果がJFスタンダードの基準と必ずしも合うわけではありません。基準を自分の実践と比べてまたニラメッコが始まると言ったらよいでしょうか。基準を「答え合わせ」とせず「材料」とする姿に頼もしさを感じました。

結局基準とは誰かと実践について話すときの「材料」なのかもしれない。答えや正しさを求めるものではなく、誰かの（ここでは、例えばJFスタンダードの）「とりあえずの見解」として扱うのはどうかと思うようになりました。

人が集まれば、自分の実践を気軽に話し、他者の意見をもらう。時には基準を材料に議論をする。思いつきでも日々の悩みでも、そこには必ず実践の当事者としての問題意識が根付いていると感じることが多くありました。私が「基準って何だ？」とハッとさせられたのも、こうした土壌から得られたのだと感じています。

私は初め、そのような「土」になるような弱風を…と思っていたのが、すでにその土壌は存在していたのです。

ドイツでは一つの教育機関に一人の日本語教師しかいない、ということが珍しくなく、私が「みなさん、話が尽きませんねえ」と水を差すと、「だって、私一人しかいないんだもの。いいのか悪いのかさえわからないんだから」と、自分の実践に対する評価を他者と共有しながら行っている姿を見て、成熟した豊かな土壌を見せつけられたという思いがしました。

それでも、「ねえ、でも日本ではこうじゃないんでしょ？」「今って違うんでしょ？」と不安がる方もいました。「日本」という大きいけど不明確なイメージは強いですね。あれだけ自分たちの実践をもとに議論した末に「日本」という基準で確かめようとするんですから。それに対して私は、「いや、いいんです。ドイツ発信の日本語教育っていいじゃないですか。」とここだけはやけに“強風”を吹かせていました。

5. おわりに

私たちはよりよい実践を目指す中で、何を大事にしていけばいいのだろうとふと考えました。まだまだよくわかりませんが、今回「基準」について考えたことから、「基準」は“答え合わせ”ではなく、それが他者との話し合う材料であり、その材料をもとに他者と実践についてやり取りし続けることが一つのポイントだと言えそうです。

「こうあるべき!!」と向かうのも頼もしくてよいのですが、そうするといつの間にか自分自身の基準に縛られてしまう気がします。

このような気づきが得られたのは、「私の考え」「私の実践」が滲み込んだ土だったからだと思います。私は風を吹かせるどころか、栄養満点の土から吹いた風をたっぷり受けてきたようです。どこにいても、対象が誰でも、実践者同士が当事者意識を持って話し合える土壌を（ドイツからの追い風受けながら）見つけたり、作ったりしていこう、そう自分を励まして報告を終わります。

みなさんの土壌はどうでしょうか？

続く

注

- 1 日本語学習者と日本人ボランティアの日本語交流会の名称 <https://www.facebook.com/media/set/?set=a.568127119997172.1073741859.119048161571739&type=3>
- 2 JF 日本語教育スタンダード <https://jfstandard.jp/top/ja/render.do>

参考文献

来嶋洋美・柴原智代・八田直美(2012)「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号、pp.103-117

来嶋洋美・柴原智代・八田直美(2013)『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 かつどう』三修社

ドイツ語圏大学日本語教育研究会 <http://www.japanisch-an-hochschulen.de/>

ドイツ語圏中等教育日本語教師会 <http://www.vjsonline.de>

ドイツ VHS 日本語講師の会 <http://vhsjapanisch.jimdo.com/>

国際交流基金ケルン日本文化会館 日本語講座 URL :

<http://www.iki.de/jp/japanische-sprache/sprachkurse.html>

(しきぶ あやこ 北海道大学留学生センター)